

自己導尿を行っている患者の実態調査

～継続的な関わりをめざして～

泌尿器科外来○福田いづみ 森房子 原文子 井戸理絵

中村広子 井口恵美子 浅田さより

はじめに

現在 20 名の清潔間欠的自己導尿(以後 CIC と略す)患者が通院している。導入時は自己導尿のしおりの用いて指導を行っているが、その後のフォローは再診時、短時間会話をするだけで手技の確認や不安などを聞き出すことができず継続看護ができていないのが現状である。今回この研究に取り組んだ結果、患者は生活面での制限や心理、社会的にも様々な体験をしていることがわかり今後の援助、指導の方向性が見え、自己導尿のしおりも作りかえることとなったので報告する。

I 研究目的

CIC 患者に今後どのような援助、指導が必要か明確にする。

II 研究方法

1.研究期間：平成 22 年 3 月～6 月

2.研究対象、方法

1) CIC を行っている患者で同意を得た 16 名に質問票を用いた聞き取り調査。

2) CIC 指導経験のある看護師で同意を得た 17 名へのアンケート調査。

3.倫理的配慮：看護部倫理委員会の承認後、対象患者に研究の目的、及びプライバシーの厳守を保持することと、研究への参加は自由意志でありそれによって不利益は生じない事を説明し同意を得た。

III 結果

1.看護師への CIC 指導に関する調査の結果

12 名(70.6%)の看護師が自己導尿のしおりを使用し説明しており、自己導尿のしおりを使用した看護師の内 7 名(58.3%)が分かりにくい、6 名(50%)が説明しにくいと回答している。また看護師全員が手技、手順に重点をおいて説明していた。そして、9 名(75%)が自己導尿のしおりの改善が必要と回答しており、改善点は「写真がわかりにくい、専門用語が多い、文字が長い。」などの意見が多

かった。看護師の指導に個人差はみられなかった。

2.患者への聞き取り調査の結果

16 名の内男性 6 名、女性 10 名で平均年齢は 67.5 歳(男性 65.8 歳、女性 68.6 歳)だった。自己導尿のしおりを使用した患者は 9 名(56.3%)だった。看護師の説明をわかりやすいと回答した患者が多い一方看護師への不満の声も聞かれた。導尿の場所、体位については、男女とも様々だった。現在も鏡を使用し尿道口の確認をしている女性患者は 4 名で経歴は 2～4 年であった。日常生活で困ったことのある患者は 6 名で「旅行に行けない」患者は 5 名だった。自己導尿のしおりについては「見にくい」という意見が半数以上だった。

IV 考察

患者は導入時の不安や受け入れるまでの気持ち又 CIC を継続して行く中で生じた不安や悩みを話してくれた。導入の際看護師は患者の言動や表情に注意し訴えにじっくりと耳を傾け CIC に対する受け止め方を考えて関わっていき、導入後も必要に応じて相談、指導を行うことが必要である。旅行に行けない患者が 5 名おり、QOL を向上できる一方 CIC により行動が制限されていることがわかった。生活の一部としてどんな場面でも CIC ができるようそれぞれの患者の生活に沿った指導をしていく必要がある。現在旅行ができない患者とも話し合い希望があれば指導を行っていきたい。自己導尿のしおりは看護師、患者とも見にくいという意見が多く作りかえることとなり患者の声を取り入れた。

V 結論

1.患者が安心して継続できるよう定期的に関わり、必要に応じて相談指導を行っていく必要がある。

2.生活の一部としてどんな場面でも CIC が行えるよう患者の生活スタイルに沿った指導を行っていく必要がある。